

## 令和4年度水戸葵陵高等学校自己評価表

目指す学校像	「国を愛する」人間の育成 : ①学校を慈しむ心②郷土を慈しむ心③国を慈しむ心 「人を愛する」人間の育成 : ①家族・自己を慈しむ心②友人を慈しむ心③人類を慈しむ心 「平和を愛する」人間の育成 : ①家庭生活・学校生活の平和を誠実に希求する人間②日本と地域社会の平和を誠実に希求する人間③国際平和を誠実に希求する人間 「真に社会に貢献しうる有為な人材」の育成 : ①「国を愛し、人を愛し、平和を愛する」人間として、道徳性に従って、主体的、自律的に行動できる人材の育成 ②人権を尊重し、社会生活において豊かな人間関係を醸成できる、想像力、情操豊かな人材の育成 ③国際的な視野と高い学識を備え、国際社会、地域社会の期待に応じて創造力、行動力を発揮できる人材の育成				
令和4年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成状況		
新型コロナウイルス感染拡大による第1回目の臨時休校が2020年3月の中旬にあり、それから3年目となり、教育のあり方が大きく変化した。特に、学校行事は簡素化され、対面での活動が大幅に縮小された。これにより、身に着けるべき「協働的な学び」の実施の仕方が今年度の課題となった。令和5年度は、オンラインで実施できる教育活動と対面で実施すべき教育活動を明確にして、さらに教育効果をあげたい。 令和5年度第2回私学研修の幹事校であることから、今年度から「授業と評価の一体化」について、研修会を実施し、ペーパーテストのみでなく、授業内のパフォーマンスも評価する仕組みを検討した。より生徒が主体的に学べるよう、教員は支援の在り方をさらに検証したい。	本校の教育の特色をあらためて明確化する。	本校職員、在校生、保護者などから本校の教育について意見や情報を収集し、客観化をはかる。 社会はどのような人材を求めているか把握する。	数年前より本校職員、生徒から要望が出ていた早朝課外の改革について議論を交わし結論を出すことができた。 角川ドワンゴ学園、京華女子高等学校の視察を行い、本校でも参考にすべき事項について議論した。留学生を呼び込む事案は時期尚早との結論に至った。		
	①医学科現役合格 ②国公立大学合格 ③総合力の強化 ④ICT教育の充実 ⑤共通テストへの対応 ⑥学習環境の充実	現役合格者の増加を目指す。 筑波大学、茨城大学合格者の増加を目指す。 探究活動での生徒同士の活発な意見交換 Benesse、リクルートなどの外部の人による研修会の実施 授業・課外の在り方・使用している問題集の検証 集中して学習する空間（スタディールーム）、コミュニケーションを取りながら学習する空間（ホール）の活用	医学科の合格者は3名で、現役生は1名であった。 筑波大3名、茨城大9名の合格者であり、目標とする筑波大5名、茨城大10名に近づいた。 リクルートによるスタディサプリの教員用研修など実践できた。 使用する問題集等については、実績の出た今年度の3学年の使用問題集や生徒の実態をみて、次年度以降の参考にするのが望ましいと思われる。 MT前はスタディールームを開放し、集中して取り組む環境を整えることができた。		
	以下の1～5までを昨年までは主な業務とした。今年度は、各業務遂行後5を継続していく。 さらに今年度も、教育振興会総会後の保護者懇談会が校内で実施予定でないため、『進路資料』の作成は時間がとれる。しかし、「学校基本調査」等の取りまとめは、締め切り日が例年通りなので効率さが求められる。 1.大学進学関連の情報収集 2.進路資料の発刊 3.大学進学関連の情報分析・提供 4.模擬試験の時間割作成を始めとする実施計画およびその後の処理 5.進学コーディネートセンターの業務に関するマニュアル	具体的な課題としては次の6つ。 ①『進路資料2022』の作成 ② 模擬試験の年間計画作成から申込み、模擬試験の時間割作成、さらに問題仕分け、答案発送、料金の支払いのための支出決議書の作成 ③ 進路情報の管理 ④ 大学進学関連の情報収集 ⑤ 電子化された各文書のクラッシャーを活用しての通知 ⑥ 各種業務に対応するためのマニュアルの作成	『進路資料2022』は当初の計画通りに生徒及び本校関係者に提供することができた。 全学年とも年間計画通り、申込み、計画、実施、発送、支出決議書の作成を滞りなく遂行することができた。さらに、当初の予定にない模擬試験に対しても年間計画と同様に対応できた。 大学入試関連の情報収集は、今年度は主にベネッセハイスクールオンラインに登録・ログインすることで対応した。 マニュアル作成のうち『進路資料』については、その作成が必要ないことがわかった。		
	交通安全指導の徹底	全教員で、登下校中の指導に当たる。 HRでの指導の徹底	毎日、登下校時に全職員が輪番で学校周辺の交通指導に当たり、また、生徒会本部とも協力して交通マナー向上を呼びかける機会を設けることができた。交通事故防止啓発の看板も設置。昨年度よりも事故・苦情報告が減少したことから、一定の効果は得られたと考える。 その一方で、自転車点検や交通講話などの指導機会を複数回設けることはできず、来年への課題といえる。HRでの指導については、年度当初や事故、苦情が起こる度に指導してきたが、継続的な指導とはいえず、これも来年度への課題に挙げられる。		
生徒会、各種委員会活動を充実させ、主体的に活動できる環境を作る。	生徒会を中心とした各行事の充実。 ・文化祭 ・野球応援 ・地域活動 ・SDGsの趣旨に伴った生徒会活動。	感染予防対策を講じながら各種行事に臨んだ。文化祭ではオープニング・エンディングセレモニーを実施。各クラス工夫した臨んだが、運営全般において感染対策等十分徹底できず、感染者を増やしてしまった。次年度への反省点である。 野球応援はプラスバンドと一部生徒の参加による「観戦」の形をとって実施した。 生徒会主催による構内、地域の清掃ボランティアやリサイクル、中庭の活用等SDGsの精神に沿った活動が展開できた。			
評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	全体評価	次年度への主な課題
教科	国語	・基礎学力の育成 〇WTやMTを活用しながら、古文単語の語彙力や文法に関する基本的な知識を養う。 〇漢字検定・日本語検定などの資格試験を活用し、漢字力・語彙力の充実を図りながら、思考力の基盤となる基礎学力を養う。	c	B	〇WT・MTを計画的に行い、年間を通して範囲を事前に告知できたことで、生徒の自主性と知識の定着を図ることができた。 〇現代の国語・現代文の授業時数が少なくなった影響で、授業時間内での学習時間を十分に確保することができなかった。計画的な指導を次年度以降は心掛けた。 〇さまざまな文章に触れることで、筆者の論理展開を追うことができるようになった。 単元ごとにChromebookを活用して、講義型の授業から脱却しようとする試みが行われた。次年度以降はこの動きを加速させたい。 〇適宜、書く作業を取り入れることで書く力の醸成に取り組めた。 〇文章の共有をとおして、他者の意見に触れる機会を多くつくることができた。
	読解力・思考力・表現力の育成	〇教材を通して、文章にあわせた正確な読解力を育成する。 〇ChromebookなどのICT機器を活用して、的確な情報を選び取るメディアリテラシーや情報を読み取る読解力を育成する。 〇様々な教材について書かせる授業運営を心掛けながら、生徒の表現力を養う。 〇Chromebookの共同編集などの作業から、自他の文章を客観的に読みながら、適切に自分の考えを伝えられる力を養う。	b		
社会	情報化・グローバル化が進化する社会の中で、必要となる知識や思考力、判断力をしっかりと身につけさせる。	〇教員による板書や解説だけでなく、視覚教材（写真や動画など）の活用や体験活動（ワークショップや特別講座への参加など）を通じて生徒自身が主体的に学べるように意識する。1、2年生はChromebookを有効に使いながら、ICTのスキルアップを図る。 〇適宜時事問題も取り上げながら、社会における様々な事象の原因、本質、課題を生徒が正しく理解し、その解決策を探求していける雰囲気をつくりだしたい。科目を問わず、授業では答えを「教える」のではなく、生徒に「考えさせる」姿勢（発問）を重視していく。	b	B	〇科目の特性によって目的や方法は異なるが、多くの授業において、プロジェクター等を使用した視覚教材の活用が定着してきたように感じている。グループによる話し合いや発表（プレゼン）の時間を設けるなど、さまざまな問題について生徒主体で考えさせようとする試みも目立った。今後は内容を精査しながら、生徒にとってより興味深い授業を展開できるようにしていきたい。一方で、Chromebookを使用した授業は科目間、担当者によってかなり差があった。クラスルームを使った課題や小テストの配信など、Chromebookでできることを教員間で共有し、情報交換をしながら有効に活用していくことが課題である。法教育講座、工場見学、裁判所見学など外部団体を利用した学びは、例年通り効果的に実践できていた。 〇医歯薬、特進iコースを中心に共通テストを意識した授業や問題演習は実践できた。ただし、今年度は出題傾向や難易度がまだ定まっておらず、指導が難しい部分もあった。今後も大学入学共通テストの動向を注意深く見守りながら、指導方法を構築していく必要がある。推薦および国公立2次対策は、教員の専門分野を活かした個別指導ができたと思うが、難関国公立大の2次試験（社会2科目）への対応は、本校のカリキュラム上難しいのが現状である。
	授業や課外を通じて入試対策をしっかりとおこない、得点率や合格率のアップに繋げる。	〇1～2年次は主に授業、3年次は課外も含めて共通テストレベルの内容を強く意識した学習を進める。とくに課外では実践問題を数多く解かせて思考力を問う問題に慣れさせる。状況によっては国公立2次の論述指導や私大の独自入試対策を個別におこなう。（主に医i）また、AOや推薦入試対策として面接や小論文を念頭に置いた個別指導をおこなう。（全コース）	b		

数学	教員の指導力向上	○教科部会において各自の指導法の報告会を実施。 ○定期的な入試問題の解答作成および提出。 ○各教員による年間通しての授業参観の実施。	a	B	○新課程における統計分野の研修会を長期休業などを利用して2度にわたり実施した。高校時代に必修でなかった教員も多く、新たな内容を学ぶことが出来、有意義な研修ができた。 入試問題演習は年に2回実施し、各々計4大学分を解き、情報交換をおこなった。 互いの授業を参観することに関しては、それぞれの持ち時間が多く、限られた回数しか実施できなかったが、授業後の互いの感想などを参考に、次回の授業に生かした。 ○授業進度に関しては、年間計画通りに進んでいないクラスもあったため、他のクラス担当者からも声を掛け合い、進めていった。 ○教科書の指導書を有効に利用し、視覚的にわかりやすい授業ができた。 水戸地区の教科主任会議に出席し、情報交換をおこなったが、どの学校も模索中であったが、それぞれ学校の良い部分を参考にしていきたい。
	学年、コースによる進度の差がないよう努める	○教科部会において自分以外のコース学年の担当者と声を掛け合い、確認していく。	b		
	ICT教育の推進	○Chormebookの活用。新1年生担当者は昨年経験している2年生担当者と意見交換しながら授業に活かしていく。 スタディサブリの効果的な利用	b		
	新課程の指導法・進度の研究	○他校の情報も仕入れながら、生徒の負担が減るような履修の仕方を構築していく。	c		
理科	・自然に対する知的好奇心や探究心を高め、基本的概念の原理・法則を理解し、科学的な思考力・表現力の育成を図る。	○観察・実験など探究方法を取得し、その結果を分析・解釈することで原理・法則を理解する。また、この過程で導き出された自らの考えを表現する学習活動を充実する。 (デジタルコンテンツを用いることで実験、観察にふれる機会を増やす。)	b	B	○「自らの考えを表現する学習活動」へのChromebookの活用方法をさらに教科内で研修、共有の余地があると感じた。 ○デジタル機器を使った授業に関して、1・2年生はChromebookを所有しているため、テストに関わる課題や、テスト範囲などの連絡はクラスルームを活用し行うことが出来た。しかし、3年生に関してはChromebookを所有していないため、スマートフォンでClassiを活用し課題配信や、連絡を行ったが難しい面もあった。来年度からは、全学年がChromebookを所有するため、本年度の問題点を改善しより活用していきたい。 ○単位数がどの科目でも減少し、さらに3年次は行事、模試等で授業がなくなるため、模試対策などに充てる時間が少なくなっている。そのなかでも、より効率的な学習法について各科目で話し合う必要がある。
	・デジタル機器を用いた授業の充実を図る。	○1・2年生はChromebook、3年生はスマートフォンやPCを用いてwebテストを実施し、感染症対策で登校できない生徒への授業配信も行う。	b		
	大学共通テストに向けて教科指導の具体的方策を実行する。	○データや表の活用、入試問題の分析、実験考察問題などについて、定められた解答時間で活用できる科学的思考力、表現力、判断力を養う。	b		
保健体育	生徒個人の健康の保持・増進、体力の向上を図る	○スポーツテストの実施、評価、フィードバックをし、体育の授業内容を検討し、生徒個人の健康の保持増進、体力の向上を図る。	b	B	○データの処理、フィードバックについて更なる工夫、改善が必要。 ○体育理論の授業をさらに充実させる必要がある ○情報をいち早く入手し、しっかりと授業に生かすことができた。
	生涯スポーツの体得	○保健ならびに体育理論の授業を通じて健康と運動のかかわりについて理解を深めさせ、生涯にわたって取り組むことのできるスポーツに関わったり、日常的に行うことができる運動に取り組ませたりする。	b		
	個人及び社会生活における健康・安全について理解を深める	○DVDや新聞記事などのメディアを活用し、タイムリーな話題から個人や社会生活における健康、安全について考えさせる。 ○偕楽園や千波湖などを体育で活用し、安全面の教育を図る。	b		
芸術	様々な芸術の美を理解する	○幅広い芸術の美にふれることで感性を磨き、楽しく自己表現する	a	A	○音楽、美術、書道の枠にこだわらず、芸術鑑賞の機会を増やすことで、様々な芸術の美を理解させたい。
外国語	英語4技能の育成を目指す	○1学年では、English 4skillsを活用し、特に生徒が苦手とするlistening、writingを強化しながら、検定試験対策を行う。 ○2学年では、オンライン英会話などの機会を活用し、特にspeakingに力を入れ取り組む。 ○3学年は、授業では共通テスト対策に力を入れる一方、積極的に検定試験への受験を促すことで、バランスよく4技能の育成に努める	b	B	○ English 4skills 今年度はコース全体で、活用機会を設けるなどしたことで、使用頻度も高まり英検合格率の上昇につながった。しかし今年度後半には、アプリの不具合で計画通りに活用できなかった。そのため、次年度では、利用そのものを含めて検討していきたい。 ○ その他の活動 今年度は、感染症の影響も少なくなり、オンライン英会話以外にも、授業内で「話す」活動も含め、ペアやグループで活動できるようになってきた。最初は英語を話すことに抵抗があった生徒も、これらの活動を通して、積極的に英語を話せるようになったようにみえた。次年度は、感染状況を踏まえながら、さらに多くの活動を検討していきたい。
	英語を使い、自らの意見を発信する機会を提供する	○話すことはもちろんのこと、授業内において、日常生活に関連したテーマに基づき、英語を用いてまとめた文章を書くことで、生徒の発信力の向上を目指す。	c		
	教員間での英語指導法の共有化をはかる	○授業で使用するテキスト(デジタル教科書)やスタディサブリなどのデジタルコンテンツの使用法や使用頻度を、担当者に関わらず統一し、教科指導にあたる。	b		
家庭	家庭生活に関する基本的な知識や技能を習得させる	○衣食住の諸分野、保育や高齢者に関する社会福祉、消費者教育などを通し家庭科の全分野についての基礎を理解できるようにする。また、実践的な活動を通し深い理解とともに技能を向上させる。	a	B	○今年度は昨年度よりオンライン授業が減ったことで授業時間がより確保できたこと、コロナウィルスの緩やかな終息により昨年度実施することのできなかった調理実習・被服実習を行うことができた。次年度は今年度の反省を生かし、より役立てられる知識や技術、物の見方・考え方を身につけさせられるようにしたい。
	家庭と社会の繋がりを理解し、広い視野を持って社会の諸問題を捉え課題の解決について考えられるようにする。	○家庭生活と社会の営みを分断させず社会が家庭の延長線上にあることを各分野にて扱い、社会で起きている問題を自分事として捉えられるようにする。また、諸課題を扱うなかで、その解決についてその根深さや難しさを理解しながら考えられるようにする。	b		
情報	基本技能の習得	○ワープロ、表計算、プレゼンテーションソフト、プログラミングの実習を通して基本的な知識・技術の定着に努める。情報倫理やモラルの必要性を認識し、著作権や個人情報保護の重要性について理解させる。	b	B	○これまでは旧課程であったが、次年度から新課程になり飛躍的に内容が変更になる。共通テストも見据え、プログラミングなどをより深く扱う必要がある。 SNS等に関する社会問題も随時授業で扱い、注意喚起を継続して行いたい
	情報リテラシーの養成	○求めている情報をいかに理解し、その情報を的確に探索・評価・判断し、自ら情報を発信するといった、情報を利用できる能力を高める。また、発信する際の危険性を認知した上で、適切に発信できる情報リテラシーも高める。	b		
教務部	転退学者数の削減	○生徒の生活や学習態度に関する情報について早期に把握し、全教員間で共通理解を図るとともに、学年団に生徒・保護者との信頼関係の構築に努めるように求めていく。	c	B	○令和4年度の教育課程を完成することができた。 ○オンライン授業の実施により、ICTを駆使した特色ある授業展開をすることができた。 Chromebook導入後の授業展開についても、各職員が意欲的に準備を進め、実施できた。 ○1、2学年がChromebookを一人一台所数しているため、ICT機器を活用した効果的な教育を実施することができた。 ○概ね基礎学力の定着を図ることができた。 ○校務の効率化と、正確性を高めるために、さらに推進したい。
	新学習指導要領への完全移行にともなった各	○大学入学共通テスト導入に合わせて、教育過程の改善点について、進路指導部と連携しながら検証し、改革を図る。 ○各コースの教育過程について検証し、国公立大学等の進路に対応した、特色ある教育課程作りに反映させる。	b		
	進学先対応の教育課程の検証と構築	○思考力、判断力、表現力の指導の方向性を、進路指導部と連携しながら設定する。	b		
	授業の展開の改善	○多様化した生徒の現状に対応する授業(分かる授業・主体的に取り組む授業楽しい授業・実力がつく授業など)の工夫改善を図るべく研修を充実させる。 ○ICTを活用した授業や学習支援のあり方について研究するとともに、推進していく。	a		
	成績不振者に対する基礎学力の定着	○WT、MTでの成績不振者等について、学年、進路指導部との連携のもとに効果的な補習指導ができるよう支援する。	a		
	教員の校務の電子化	○情報共有、出張申請・復命、年休申請など、教員の校務の電子化を推進した。	a		

進路指導部	医学科現役合格者輩出	○担任、進路指導部、進学コーディネーターセンター、医専チームと連携。入試制度の分析および情報の収集に努め、対象生徒の進路指導に活かす。 1学年および2学年においては、担任との情報交換をおこない長期のスパンにおいて計画的に進路指導に努める。	b	B	○医学科受験者に対しては各々情報交換をおこない受験することができたが、結果としては3名合格となった。面接の練習で緊張してしまう場面も見られたため今後は早い段階から面接の対策も必要であると思われる。 ○結果として国公立大学63名合格。例年よりは良い結果となった。この要因を今後分析する必要があると思われる。 受験レポートは茨城大学を中心に作成した。今後も継続して作成にあたり、役立てていきたい。 ○理系の英語対策を次年度も強化していきたい。 ○各教科、教科内で話し合いをおこない指導に当たっていた。特に1学年が新課程にあることから教科内での取り組みに工夫をしていた。
	国公立大学合格者50名以上	○中でも、筑波大学、茨城大学、茨城県立医療大学等県内にある国公立大学の数を増やす。 ○大学進学指導係が本校生の過去の受験者の分析レポートを作成。それを参考に1年次から指導。 ○工学部の受験者を増やすための英語の強化（英検2級以上）が必須。	a		
	学力向上	○授業の充実。教員の指導力強化および教科ごとの研修。 ○WT、MT作成にあたり意図を持った作問。 ○進学Vコースにおいても本年度よりWTを実施。基礎力診断テストに向け、計画的な学習法の確立に励む。	b		
進学コーディネーターセンター	大学進学関連の情報収集	○「受験レポート」等をスキャナーで読み取り、電子化する。	a	A	○「受験レポート」はスキャナーで読み取り、電子化したため第3学年の面接対策指導に活用された。なお、次年度以降は、紙による「受験レポート」の作成だけでなく、WEB上で直接作成する方針も同時に推進していきたい。 ○『進路資料2022』は、当初の計画予定通りに生徒及び本校関係者に提供することができた。次年度以降は、『進路資料』の一部の項目について昨今の個人情報保護の観点から省略する予定である。 ○全学年とも年間計画通り、申込み、計画、実施、発送、支出決議書の作成を滞りなく遂行することができた。さらに、当初の予定にない模擬試験に対しても年間計画と同様に対応できた。 引き続き、各学年との連携をとり、模擬試験の実施が円滑に進むように報告・連絡を密にしていこうと予定である。 ○『進路資料』作成のためのマニュアルは、特に必要ないことがわかった。大まかなそれはその目次を見ればわかるためである。 ○大学入試関連の情報収集は、今年度は主にベネッセハイスクールオンラインに登録・ログインすることで対応した。 課題としては、ベネッセハイスクールオンラインだけではなく、Kei-naviも全学年が活用できるようになることである。そのため継続してその方法を支援していく。
	『進路資料』の作成	○『進路資料2022』を作成して、指定校等の情報を生徒及び本校関係者に提供する。	a		
	模擬試験関連の取りまとめ	○本部署立ち上げ理由の1つである業務(校内模擬試験の申込、計画、実施、発送、支出決議書の作成)を継続してすべて一括してセンター内で取り扱う。なお、土曜日に模擬試験実施の2年目を迎えたので、昨年の実施計画を参考に、より生徒たちに最善になるように実施していく。 ○模擬試験の試験時間・監督一覧等は、その実施一週間前にはクラッシュを活用して、提示する。 ○特に3学年との連携をとり、模擬試験の実施が円滑に進むように報告・連絡を密にする。	a		
	各種アンケートに即座に対応する	○昨年時間が比較的にかかるアンケート対応フォーマットを作成したので、それを活用して迅速・正確にそれを活用していく。 ○『進路資料』作成のためのマニュアルを作成する。	b		
	大学進学関連の情報分析・提供	○進路指導部と協働して、「大学入学共通テスト」等の動向をつかんでいく。なお、昨年度から各先生方は、ベネッセハイスクールオンライン、kei-navi等に登録・ログインして、大学入試関連の情報を収集する方向に転換したので、継続してその方法を支援していく。	b		
生徒指導部	いじめ、いやがらせの未然防止。	○いじめに関するアンケートを定期的実施し、各学年、各担任との情報共有を徹底し、個別指導や保護者召喚など、迅速に対応し、未然防止に努める。 ○いじめにつながるケース、事例、傾向などの情報を教員へ還元する。 ○生徒相談会の会議を定期的に開き、相談室や保健室で得た情報の共有とともに、個別に対策をとる。 ○SNSの利用に関し、メディア講話を実施。 ○HRにおいて担任がいじめやSNSの利用等に関して指導できるような教材パッケージを作成。 ○捨てアカ、偽アカによる被害への対策を検討。	b	B	○定期的にアンケートを実施し、担任だけでなく保健室やカウンセラーなどと情報の共有を図り、多くの件で問題が深刻化する前に対応することができた。 SNSについてはメディア講話の対象を1学年から全校に広げ、学年集会等でも指導をする機会を設けることができた。その一方で、各HR用の教材を作成・提供することができず、指導を担任任せになってしまうこととなった。また、SNSの被害対応についての指導を具体的に検討することはできなかった。 ○薬物乱用防止講話、交通講話に加えて、性教育に関する講話を実施。例年よりも事前事後指導もしっかりと実施することができた。生徒会本部と協力して学校周辺のハザードマップを検討したが、教室掲示までには至らなかった。しかし、新たに自転車の乗り方に関する看板を立てることができた。 ○問題行動や苦情に関する内容は、その都度Slackにて全教員に連絡し、蓄積としていつでもファイル閲覧できるよう、情報共有に努めた。 登下校指導については、出張や清掃指導との兼ね合いで、抜けてしまう場面が多々あった。校外巡視については定期調査期間だけでなく、苦情の多い場所には曜日を決めて人員を配置し、指導に当たることができた。 ○教員の負担軽減も含め、実施方法については改めて検討する必要がある。 自転車点検については、来年度以降は年に複数回の実施を検討する必要がある。啓発については、各担任に掲示物を配布。職員会議にて危険箇所を動画で具体的に説明し、生徒への指導につなげるよう指示することができた。 ○生徒相談会の会議を毎週開き、注意の必要な生徒については、学年主任や担任に報告し連携しながら対応することができた。 生徒相談部主催の研修会を実施し、本校の生徒状況を共有すると共に、その対応等について共に学ぶ機会を得ることができた。 ○生徒指導部会を定期的開催、また生徒会本部とも連携して生徒アンケートを実施し、校則を始めとした様々な生徒指導規定の見直しをすることができた。 生徒指導の状況や研修会での報告などの情報を全職員に還元することはできたが、それを指導に生かすまでのフォローまではできなかった。
	○喫煙・飲酒・暴力行為などの問題行動、薬物・交通事故などの事件・事故の未然防止	○薬物・非行防止に関する講話を実施。 ○交通講話を実施。 ○生徒会本部と協力して、学校周辺のハザードマップを作成。各クラスでの啓発の一助とする。 ○問題行動や事件事故の事例、警察や他校からの情報やクレーム等の情報を教員に還元していく。 ○登下校指導において、校外への巡回も定期的実施。 ○交通安全係により、自転車点検を実施し、安全装備の徹底を図る。また、各教室に自転車運転に関する注意事項を掲示、電子黒板による呼びかけなど啓発活動を行う。	c		
	悩みを抱える生徒への積極的な対応	○生徒相談会の会議を定期的開き、相談室や保健室で得た情報を共有し、学年と連携して対応する。 ○発達障害やLBGT、DVなど専門的な知識を要する悩みに対応すべく、講演会や研修などに積極的に参加し、教員のスキルの向上を図る。	a		
	生徒指導上の諸問題について、全ての教員が指導できるための環境を整える。	○全職員が生徒規定についてしっかりと理解し、組織的な指導を目指す。 ○全職員に、発達障害や法律など教育指導上必要と思われる専門的な知識を還元していく。 ○生徒指導の目的を明確にし、形骸化しているものを再検討するとともに、指導や手段が目的とならないよう改善していく。 ○指導する立場の教員の声を広く聴き、また生徒会本部とも連携しながら、生徒規定の見直しを検討する。	b		
保健厚生部	トイレの清掃用具置き場改善	○現状は床に直接清掃用具を置いているので、フック等を用いて吊り下げられるようにする。	b	B	○一部除き完了。バーコードが活用可能なことは確認出来た。 ○1学年の心電図検診や結核検診の時点ではまだ学生証が発行されていないため、次年度の活用は見送り。 ○防災関連の申し送りに関しては防災安全係から保健厚生部長に書面にて完了。 ○中庭の除草作業は次年度以降業者委託を検討。 ○刈り払い機の音の問題は解決しないので、土曜課外や模試の無い土曜日を確保する必要があり、進路指導部との調整が必要。
	健康診断での学生証の活用	○年度内にバーコード活用に必要環境を調べ、導入起案。次年度以降受診者の確認に学生証のバーコードを活用出来るようにしたい。	b		
	防災に関しての業務引継ぎ	○防災講話、防災用品購入、清掃活動等における益子先生担当の仕事は次年度引き継げるようにマニュアル作成	b		
図書館部	「読書センター」・「学習センター」・「情報センター」としての機能の充実。	○「各教科の教材に関連する本や学習のねらいに即して読み広げたい本」に着目して選書を行う。 ○各個人の持ち授業やホームルーム、委員会活動等、あらゆる機会を通じて読書指導を行う。 ○各個人のレファレンス能力を高め、調べ学習や課題解決能力の充実を図る。	c	C	○図書館部の人員構成として、各教科から一人ずつ図書館部に所属してもらうことにより、選書から学習・読書指導等がより深く確実なものとなる。また、教員自身のレファレンス能力の向上にも繋がる。 ○「一人一台のChromebook」に伴う図書館の対応、特にその活用について考察して行きたい。

特別活動 指導部	生徒の主体的活動度充実	○生徒会役員が本校の代表であるという意識を高め、全校生に反映できるような環境づくりを目指す。 ○生徒会が中心となって充実した生活ができるような企画立案。(中庭の活用、SDG sの観点に立った活動) ○放送委員・環境委員など各種委員会の積極的な取り組み。	b	B	○新型コロナの感染予防対策を講じながら生徒の活動をどのように行っていくか、模索しながら学校行事を進め、生徒の主体的な活動を促していった。徐々に学校生活も平常に戻ったが、感染予防対策が後手に回ってしまった点もあり、次年度への大きな反省点となった。 また、学校生活がほぼ平常に戻りつつある中、学校行事や委員会活動等の諸活動が数年ぶりに実施されることとなり、生徒相互、教員間においてもより意思疎通をはかっていくことが必要である。
	葵陵生としての自覚と発信力	○野球応援・ボランティア活動(地域の清掃ボランティア)・挨拶運動等を通して、他者への理解や地域への感謝の気持ち考える機会を作る。 ○教養講座、女性講座・文化講演等を通して自己形成の一助とする機会を作る。	b		○生徒会においては、SDG sの観点に立った活動を目指し、地域、構内の美化活動ボランティア活動や、リサイクル活動、中庭の活用やアンケートによる校則の見直しを図るなど生徒の主体的な活動につながる取り組みを行った。 ○文化祭2日間実施。構内発表の形とはなったが、オープニング、クラスやコース企画など実行委員を中心に生徒間の協調、協力等の醸成を図ることができた。企画等反省点も多く、次年度の検討事項。
	情報の共有	○各行事、部活動、校外活動について、各教職員が共通理解を持って生徒指導に当たれるようその目的や主旨を提示し、事前学習や事後指導など、円滑に生徒指導にあたってもらえるよう環境を整える。HP、電子掲示板の活用。	b		○教養講座(ジェンダー平等)や芸術鑑賞(古典芸能)等外部施設を利用した行事も平常通り実施され、生徒個々の内面の醸成を図ることができた。 ○生徒会は9月末までが任期ということもあり、生徒会としてのビジョンをどのように反映させていくか、当面の課題となっている。
ICT部	ネットワークの安全な管理運営	○校内ネットワーク環境を把握し、改善すべき点がないか精査する。 ○LANケーブル、ハブなどのネットワーク関連設備の点検。PC本体は更新されたが、ハブ等のネットワーク機器には継続使用のものもある。経年劣化が見られるものは可能な範囲で更新したい。 ○Windows自体や、それに関わるソフトウェアの定期的なアップデートに努める。 ○システムの安全管理に努め、故障時の対応を迅速に行う。 ○各教室で無線LAN接続が可能となりネットワークの安定稼働に努める。	a	B	<ネットワークの安全な管理運営> ○引き続き対応していく。 <情報・視聴覚機器の統一管理> ○今後、校内の情報機器が増加していくことは容易に想像できる。そのため、人員の増員及び管理場所の確保が必要である。 ○情報機器は経年劣化(PC内部のパーツの寿命は4年程度)するもので、一般的に3、4年の周期で入れ替えるものとされている。現在、職員の半数が使用しているPCは購入後4年半を経過していることから、次年度内の入れ替えを検討していく。 ○情報機器の管理について、使用状況管理簿の周知徹底を図るとともに、予約者、使用者の「見える化」を実施していく。 <授業、校務等でのICT機器活用促進> ○次年度も引き続き生徒及び教員のPC、Chromebook等のICT機器使用法の習熟を図る。 <情報・視聴覚機器及びシステム・ソフトウェア更新> ○引き続き検討を続ける。 <オンライン授業へのハードウェア面での対応> ○次年度以降、コロナ禍と同様の状況がきたときに即座に対応するため、情報収集を継続する。
	情報・視聴覚機器の統一管理	○今年度も新たな視聴覚機器が導入された。従来のもとの合わせしかりとした管理体制を整える。これらの機器の活用の際し、使用者・所在が不明となる機器がないように努める。使用状況を定期的に確認するとともに、機器使用者の使用状況管理簿への入力を徹底する。・今年度も新たな視聴覚機器が導入された。従来のもとの合わせしかりとした管理体制を整える。これらの機器の活用の際し、使用者・所在が不明となる機器がないように努める。使用状況を定期的に確認するとともに、機器使用者の使用状況管理簿への入力を徹底する。	b		
	授業、校務等でのICT機器活用促進	○今年度も引き続いて、将来のICT活用標準化、情報端末標準化へ向けた第一歩として、生徒及び教員のPC、Chromebook等のICT機器使用法の習熟を図る。 ○ICTを活用することで、校務の効率化を目指す	b		
	情報・視聴覚機器及びシステム・ソフトウェア更新	○ICT教育推進を目指す中で必要なデバイス・システムの導入を検討していく。	c		
	オンライン授業へのハードウェア面での対応	○コロナ禍による、全国一斉または学校単位の休校に備え、休校中のオンライン授業実施に必要な環境を整備する。	c		
庶務部	庶務文書係 ○書式の適正な管理 ○消耗品の適正な管理	○データ共有ホルダーの書式を定期的に点検する。 ○入室許可証等が無くなる前に、印刷して補充する。 ○更紙、コピー用紙、チョークなどの在庫を確認して、適宜補充する。	a	A	○用紙、チョーク等の補充に努め、ほぼ在庫を切らすことなかった。 ○生徒用の入室許可証などの用紙は早目の印刷に努め、適正に管理しました。 ○今年度は急速にペーパーレス化が進み、オンライン上での出退勤管理が進んでいる。今後も、新たな出退勤管理システムの導入など、更なる業務効率化をすすめていく。 ○同窓会報創刊号の発行は達成できた。今後、年1回の発行を定着させたい。 ○令和7年(2025年)に創立40周年を迎える。そこを目標に第1回同窓会総会を開催したい。そのための準備に取り掛かりたい。 ○教育振興会役員、後援会役員、および第3学年各HR保護者代表と協力して、内容について議論し、適切な形で4年ぶりに卒業記念パーティーを実施することができた。今年度の反省を踏まえ、次年度のポストコロナ社会におけるパーティーの実施方法について、検討していく。 ○日本学生支援機構の大学等奨学生予約採用は、当初の予定通り、4月下旬にZoomを利用して生徒たちへの説明会が開催できた。その後、選考結果の通知等についての説明会も2回開催した。 ○4月下旬の説明会は、次年度も継続する予定である。その開催等をClassiも利用して担当担任並びに生徒たちに周知していく。 ○ICT部長からの提案を採用したためホームページ等を活用した保護者および生徒への通知が容易になった。この方法は次年度も採用していく。なお、本校が公表したもの以外の奨学金についても複数問い合わせがあった。それらについても対応できるよう担任と連絡を密にとっていく。 ○奨学金関連の公文書は、配慮すべき情報を取り扱うので、それに伴うコンプライアンス研修等も必要であろう。 ○Slackの導入により、各担任との連絡が容易に行えるようになった。次年度も引き続き不備のないように申請作業を行う。
	出退勤簿整理係 ○出退勤簿の適切な入力 の促進 ○年休簿等の適切な記入 の促進 ○長期休暇中の動静表の円	○紙面やClassi等で随時、入力を促す。Classi等で適切な入力方法を周知する。 ○適宜点検を行い、押印漏れ、記入漏れ、記入ミス等を見つけたときは、速やかに本人に通知し、訂正を求める。 ○動静表は紙では配布せずにExcelファイルに直接入力をお願いする	b		
	同窓会係 ○同窓会係のさらなる活性化	○昨年度実現した同窓会員に向けて発行したDMの記憶が新しいうちに、同窓会報の創刊号を発行する。同窓会報を毎年発行できるような足がかりをつくる。 ○創立40周年を目標に、同窓会総会を実施するための準備を進める。	a		
	渉外係 ○卒業記念パーティーの円滑な運営と成功	○卒業記念パーティーの内容について議論を深め、有意義なものとなるよう、教育振興会・後援会常任委員、第3学年各HR保護者代表および会場担当者として協力して推し進めていく。 ○各HR進路決定者を中心にHR企画の代表者を決定し、本係教員と連携しながら、各HRの企画を、工夫を凝らしたものにす。	a		
	奨学生係 ○該当機関との円滑な書類等の受け渡し ○奨学金情報の迅速な告知 ○質問・疑問点等への適切な返答の用意 ○奨学金希望者の書類管理	○日本学生支援機構の大学等奨学生予約採用については、4月下旬にZoomを利用して生徒たちへの説明会を開催する。 ○ホームページ等を活用し、保護者および生徒への通知の徹底に努める。 ○ひとつの奨学金に対して、係の複数人で、書類の不備・遅延等について互いに連携しながらチェックにあたる。 ○該当生徒への提出期限の厳守を徹底し、書類提出締切日より1週間前を目安に送付するような前倒しの計画とする。 ○奨学金関連の公文書は、一読しただけでは理解が容易ではない。その内容について質問・疑問等を受けた場合に、それらに適切に答えられるよう、文書を読み込んでおくとともに該当機関との連絡を密にしておく。	a		
	就学支援金係 ○システムの運用  ○就学支援金を扱う体制づくり	○就学支援金申請用のシステム運用は大変煩雑であり、しかもPCで作業を行うので、同時に数人で作業することが不可能である。そのため、申請の時期は支援金の作業のみに専念できる人員を配置したい。 ○申請は手間のかかる作業であるが、不備等があってもいけないものである。今年度までのように教員がほかの校務の合間に作業していると間違いも発生しかねない。体制として不完全なものである。また、提出書類の保管場所や作業	a		

		○学年との連携	○スペース、システムをインストールしてデータを扱うための専用端末などが整っていない。今年度は細心の注意をもって作業に当たりたいが、前項のことともあわせ、今年度以降は申請に不備が生じないような万全の体制をソフト面、ハード面の両面で構築し、申請作業に当たる必要がある。 ○就学支援金の申請には家庭からの書類提出から休退学等の生徒動静の情報も必要である。書類の不足や申請自体の失念、生徒情報の学年から係への未伝達等、申請の不備につながることはないよう、学年・担任との連携を密にする。	a		
生徒募集部	○志願者2500人、入学者300人を目指す ①広報係を中心に興味関心を持たせるパンフレット・チラシを作成し、有効活用する。葵陵グッズを充実させる。 ②入試資料を持参して中学校・学習塾を訪問し、先生方とのコミュニケーションを図り生徒情報を得る	1.生徒募集広報物作成 (1)ポスター ○4月中に作成、4月下旬納品 (2)パンフレットリーフレット ○5月中に発注、6月下旬納品 (3)チラシ ○夏の見学会(6月納品) ○秋の説明会、体験模試(9月納品) (4)資料 ○シャイニングスター&大学合格速報(随時) (5)葵陵グッズ ○ボールペン、クリアファイル (6)学校紹介動画(PV) ○新しいPVを作成し直す	b	C	○具体的方策の取り組みは問題ないと考えているが、志願者・入学者の目標を達成することができていない。そのため、募集部で取ることのできる方策の見直しとともに、募集部として対外的に宣伝できる学校としての魅力(進学実績の向上)を高めていくことが必須である。 ○入学者数は減少しているが、学業奨学生はある程度確保できている。 ○特技推薦からの入学者を増やさなくてはならない。情報発信が不十分であるので、本校HPの部活動の活動・実績報告の頻繁な更新を行う。そのためには部活動の意識改革と協力が必要となる。 ○地域によっては受験者が減少または皆無の中学校もあり、訪問する中学校の取捨選択をする。 ○中学生の人数減少、県立高校の倍率低下、物価高の継続等の家庭の経済状況の悪化、などの私立高校を取り巻く環境の変化に応じたコースごと、奨学生の人数の目標人数の再検討を行う。 ○今年度に引き続き、メール配信による情報提供を行う。上記HPの更新とも合わせ、本校から提供できるコンテンツを充実させる。	
		2. 中学校訪問による先生方との信頼関係の構築 (1)5月 ポスター配付、「私立高校説明会に参加させてもらう」 (2)6月 学校見学会チラシ配布、「在校生状況報告」 (3)9月 入試説明会・入試体験模試チラシ配布 (4)9~11月 私立高校説明会 (5)10~11月 3学年会での入試説明 (6)2月 入試結果報告、「本年度入試に関するご意見」「他校情報」等を伺い、入学生確保や次年度募集活動に生かす。	b			
		3. 一歩踏み込んだ学習塾訪問 (1) 大手・中小規模学習塾訪問 該当塾出身者を把握し、随時報告できるようにする。 (2) 新規出店教室の開拓 あらゆる資料を持参する。	c			
	○定員(280人)の確保に直接つながる単願者を増やす。	1. 特技推薦での確保のために、各部からの活動状況・実績の発信に力を入れる。中学校等の大会見学(各地区・県)なども行う。 (1) 大会本部へ挨拶・名刺交換。 (2) パンフ・選手名簿等の入手。 (3) 大会の視察。	b			
		2. 学業推薦、併願での確保のために、あらためて進学実績のアピールに力を入れる。	b			
		3. 学校紹介動画の作成 (1) 本校への興味を引き付けるような内容。 (2) 同時に1分程度にまとめた動画も作成し、本校HP等ネット上で公開する。	c			
		4. 担当中学校・学習塾の再考。	a			
	○優秀生徒の確保 学力トップレベルの入学生確保。	1. 奨学生の獲得 (1) アンケート、塾訪問での情報をもとに、優秀者を逆指名する。 (2) 体験入部等の情報を活かす。	c			
		2. パンフレット・医歯薬リーフレットによる「医歯薬コース」の強調 (1) 現職の医師、薬剤師や医学部生等のOB・OGの紹介。	c			
		3. 「特進iコース」の中学校・塾への強力なアピール (1) 選抜クラス存在の強調。 (2) 国公立大学、難関私立大学合格に照準を絞った指導。 (3) iプロジェクトの内容。	c			
	4. 「進学Vコース」の生徒の満足度を確認し、「やり甲斐」「達成感」「楽しさ」をアピール (1) イベント、行事の紹介。 (2) 総合学習、特別テキスト等アピール。 (3) 進学・就職実績のアピール。 (4) 特技推薦入学者の増は不可欠。	c				
	○ウェブ申し込みを増やす ○出願や受付の簡略化、情報管理の向上を図る。	1. ウェブ出願は昨年度から実施。担当係設置。 (1) 学校見学会、入試説明会、体験模試をウェブ申し込みにして中学校の負担を減らすと同時に、情報管理を向上させる。 (2) 希望者にメール配信による情報提供を行う。	a			
学年	第1学年	○基本的な生活習慣の習得	○時間に遅れず、計画的に行動できるよう指導に当たる。 ○話を聞く姿勢・態度、挨拶や礼儀作法・言葉遣い等を、様々な場面で折に触れ指導する。 ○SNSを含め社会におけるルールを体得するため、服装や頭髪、Chromebookやスマートフォンなどの所持品に関する本校のルールを繰り返し指導する	b b b	B	○感染症への体制が変わり、集会や行事への参加が徐々に増えた。話を聞く姿勢や容儀など全体で指導する場面が増えたものの、時間通りに集合するなどの意識が不十分である。時間を厳守する姿勢を生徒も教員も意識することが課題である。 ○活動の目的を意識させたり、総合探究で主体的に取り組める環境の構築を図ったりすることはできた。一方で、生徒の活動の記録は感想文など各コース取り組めているものの、情報を一元化したり、いつでも生徒自身が参照できるように整理したりする情報整理の課題が残っている。 ○体験学習や講話で先輩の話を聞く機会を設けることができた。一方で、愛校心の醸成や教育活動へのモチベーションの刺激がどれだけ効果があったのかを測る客観的な手段が必要である。 ○各コースICTツールの活用や授業の復習活動など、生徒が無理なく取り組める状況を作ることができた。2回実施されたスタディサポートでは学力上昇が見られた。引き続き、ICT教材の一層の活用、教科担当者との連携を通して全国模試やスタディサポート、基礎学力診断テストなどでの実力向上を目指したい。
		○主体性・協調性・協働性の育成	○自己の目標を持ち、目標を達成するまでの計画を立て、目標を実現させる能力を養う。 ○Classi・Chromebook・学習の記録などを活用し、生徒自身が記録し、振り返ることで、考える力を養い、それに対する教員のフィードバックにより生徒の成長を促す。 ○日頃の学習活動やSHR・清掃・総合探究・LHRや学校行事や部活動を含めた特別活動において、主体的に取り組める環境を整えとともにコミュニケーション能力や協調性を身につけさせる。 ○各種行事の意義・目的を明確化し生徒に意識させ、事前・事後指導を効果的に行い、主体的・計画的に取り組むことのできるよう支援する。	b b a a		
		○愛校心の育成	○本校の建学の精神・校訓・教育方針を理解させ、本校の過去の生徒達の活躍を知ることによって愛校心を醸成する。 ○他学年と連携し、現在の在校生の活躍などを知ること、さまざまな活動に対するモチベーションを向上させる。	b b		

	○基礎学力の向上と学習目標・進路目標の確立	○スタディーサポート等のアセスメント教材を効果的に利用し、担任との面談等と連動させ、学習意欲の向上や学習方法の改善等を実現する。 ○ClassiやChromebook等のICT教材等を有効かつ適切に活用し、学力の定着と向上を図る。 ○授業に対する取り組み、テストに向けた計画的な学習が習慣となるように担任と教科担当者が連携を密にしながら指導する。 ○自己理解を深め、自らの適性について考え、将来の夢を明確に持てるようにする。 ○模擬試験、各種検定試験などを積極的に受験させ、学習成果の可視化に努める。 ○望ましい文理選択、選択科目の決定ができるよう、計画的に指導を行う。	a a b b a a		
第2学年	○基本的な生活習慣の習得	○時間に遅れず、計画的に行動できるよう、集会等を利用し指導に当たる。 ○話を聞く姿勢・態度、挨拶や礼儀作法・言葉遣い等を、様々な場面で折に触れ指導する。 ○SNSを含め社会におけるルールを体得するため、服装や頭髪、Chromebookやスマートフォンなどの所持品に関する本校のルールを繰り返し示して指導する。	c	C	○コロナ禍下における規制等により十分な集会等を実施できなかった。 ○今後、アフターコロナの状況に応じ、定期的かつ効果的な集会の開催を模索。 ○SNSに関する事件・事故が発生し、今後も同様の状態は続くと思われる。 ○今後、SNSに関する指導の効果的な方法を模索し、指導時間を確保する。 ○Classi・スタディサプリなどの教材、ChromebookなどのICT機器、Googleクラスルーム等の周知・理解・指導が不十分である授業や科目が相当数存在。 ○今後、ICT機器や教材を効果的に使用した教授方法・指導に関する関係全教員の研鑽が必要。 ○本校の建学の精神等の理解の深化のための指導時間を確保。 ○他学年・生徒会と連携し、学校全体の在校生の活躍を俯瞰的に把握、伝達する時間を確保。 ○担任による面談時間の確保。 ○Classi等のICT教材等を有効かつ適切に活用するための関係全教員の研鑽。 ○ベネッセハイスクールオンラインやコンパス等の使用をふくめた、全体的・個別的な受験に向けた指導体制の構築。 ○担任を中心に、生徒ひとりひとりとこまめにコミュニケーションをとることにより、生徒の状況把握に努めることができた。そのため、問題行動などの原因に素早く対応することでいじめやその他の問題を防止することができた。 ○交通安全、特に自転車の運転、公共の交通機関の利用についてはさらなる改善を要する。 ○SNSの活用についても、いくら指導しても十分とは言えない状況であり、日頃から継続的な指導が必要である。 ○主体性を発揮して学業、学校行事、部活動に取り組む生徒が増えたものの、自立、自律をうながす指導をより充実させていく必要がある。 ○基本的な生活習慣は家庭との連携をより強化し、保護者等の理解と協力を求める必要がある。 ○人として大切な素養や社会で大切なルールやモラル、マナーを定着させる教育を日頃から継続的に行う必要がある。
	○主体性・協調性・協働性の育成	○自己の目標を持ち、目標を達成するまでの計画を立て、目標を実現させる能力を養う。 ○Classi・Chromebookなどを活用し、自ら記録し振り返り行うことで考える力を養い、それに対する教員のフィードバックにより生徒の成長を促す。 ○日頃の学習活動やSHR・清掃活動・総合探求・LHRや学校行事や部活動を含めた特別活動において、主体的に取り組める環境を整えとともにコミュニケーション能力や協調性を身につけさせる。 ○各種行事の意義・目的を明確化し、事前指導・事後指導を効果的に行い、主体的・計画的に取り組むことのできるよう支援活動を行う。	b		
	○愛校心の育成	○本校の建学の精神・校訓・教育方針を理解させ、本校の過去の生徒達の活躍を知ることで愛校心を醸成する。 ○他学年と連携し、現在の在校生の活躍などを知ることで、さまざまな活動に対するモチベーションを向上させる。	c		
	○基礎学力の向上と学習目標・進路目標の確立	○スタディーサポート等のアセスメント教材を効果的に利用し、担任との面談等と連動させ、学習意欲の向上や学習方法の改善等を実現する。 ○Classi等のICT教材等を有効かつ適切に活用し、学力の定着と向上を図る。 ○授業に対する取り組み、テストに向けた計画的な学習が習慣となるように担任と教科担当者が連携を密にしながら指導する。 ○自己理解を深め、自らの適性について考え、将来の夢を明確に持てるようにする。 ○模擬試験、各種検定試験などを積極的に受験させ、成果の可視化に努める。	c		
第3学年	○安心、安全な学校生活を提供	①いじめは絶対に許さないという話を折に触れる。 ②生徒のささやかな変化や言動に常に注意し、いじめに対し早期発見・早期対処する。 ③生徒指導部と連携し、交通安全指導、学校生活指導を徹底し、すべての生徒が安心して通学できる環境をつくる。 SNS等の望ましい活用方法、正しいコミュニケーションのあり方を考えさせる。	b	B	○担任を中心に、生徒ひとりひとりとこまめにコミュニケーションをとることにより、生徒の状況把握に努めることができた。そのため、問題行動などの原因に素早く対応することでいじめやその他の問題を防止することができた。 ○交通安全、特に自転車の運転、公共の交通機関の利用についてはさらなる改善を要する。 ○SNSの活用についても、いくら指導しても十分とは言えない状況であり、日頃から継続的な指導が必要である。 ○主体性を発揮して学業、学校行事、部活動に取り組む生徒が増えたものの、自立、自律をうながす指導をより充実させていく必要がある。 ○基本的な生活習慣は家庭との連携をより強化し、保護者等の理解と協力を求める必要がある。 ○人として大切な素養や社会で大切なルールやモラル、マナーを定着させる教育を日頃から継続的に行う必要がある。 ○進路指導はおおむね良好な成果をあげることができた。 ○一方で、残念ながら希望していた進路目標を達成させることができなかった生徒がいたことについては、今後の学習指導、進路指導の課題として真摯に向き合う必要がある
	○自立型人間の育成	①何事においても自分で目標を掲げ、目標を達成するまでの計画を立て、自分の力で実行する能力を養う。 ②Classiなどを活用し、生徒自身で自身の取り組み振り返り、それに対する教員のフィードバックにより生徒の成長を促す。 ③日頃の学習活動や学校行事において、主体的に取り組める環境を整えとともにコミュニケーション能力や協調性を身につけさせる。	b		
	○基本的な生活習慣の定着	①登校時間や授業開始時間に遅刻することがないよう、時間を守ることを指導する。 ②話を聴く態度や姿勢、挨拶や礼儀作法、言葉遣い、清掃活動など人として大切な素養を繰り返し指導する。 ③制服の着こなしや頭髪、スマホの使い方等の本校のルールを細かく示し、常習的な違反者がいないようにする。	b		
	○進路目標、学習目標の確立	①自身の進路目標を見据えた準備、取り組みを主体的に行わせる。 ②担任を中心として進路指導部、学年、部活動顧問が連携し、組織的に進路指導に当たる。 ③すべての生徒が目標達成に向けて最後まで努力を継続し、途中であきらめないように支援する。 ④学習意欲と学力を向上させるために、模試やスタディーサポート、MT等の結果を分析し、面談等でフィードバックする。	b		

コース	医歯薬	医学部医学科合格	○医学科合格専門チームとの連携を強化する。 ○模試分析、入試問題分析を通し、生徒の個性に適した入試方法などを提示する。 ○入試対応の面接指導はもちろん、学習計画を生徒に説明させて自分の意思を説明させるなど、様々な形で入試指導を行う。	a	A	○医学科合格専門チームとの連携教材は、あまりできなかった。志望理由書や面接で個別に依頼して協力をお願いした。 ○模試や入試問題の分析、本人とのマッチングは実施できた。 ○個別に読書を促したり、新聞記事を提示するなど、機会を捉えて入試につながる指導を行った。
		(1年) ・医学部や医療系学部への進学に必要な知識を身につける。	○「医歯薬講座」のそれぞれに設定されている目的を、生徒に説明し、意識させる。入試の面接試験等につながる知識を得る機会であることを理解させ、特に事後指導を充実させる。 ○活動記録をつけさせる。 ○探究活動を通して、「協働」を実践させる。意思決定までのプロセスや、他者を尊重する心を学ぶ。	a		○探究活動では適切にICT機器を有効に用いながら、課題解決に向けて班員と協力し、取り組むことができた。 ○医歯薬講座について、生徒は真摯に取り組み、医療系への興味関心が深まる場面も多く見られた。経験したことを入試へのつなげることができるように引き続き指導していく。 ○医歯薬講座の感想文やClassiのポートフォリオによって、活動記録を書かせた。今後も、適切な方法で生徒の活動を記録していく。
		(1・2年 共通) Chromebookの活用	○昨年度使用した2年担任の指導上の知識は貴重である。実施の様子や改善点などの情報を共有する。 ○新たな提案や便利な教材などについても、積極的に情報交換し、Chromebookを有効に活用する。	a		○Chromebookを用いて、情報の取得だけでなく、保存や共有、分析、比較、発信、伝達する力を養った。 ○特に2年生は情報を共有して作業することが当たり前に行えるようになってきている。 ○次年度は統計処理や今以上の情報リテラシー、情報の選別をする力を身につけさせる。
		(2年) ・進路目標を早期に具体化する。	○これまでの「医歯薬講座」で得た知識をもとに、自分の進路を具体的に考えさせる。 ○1年次から継続して行う探究活動を深化させる。文化祭での掲示物作成・秋の発表会を実施する。 ○志望理由書の添削指導を充実させる。学年と連携し、早期に指導を始められるようにする。	a		○探究活動については、例年通りに発表会を行ったが、文化祭で一度まとめた所で継続意識が途切れてしまった。探究には時間がかかり、継続意識を持続させる必要がある。 ○志望理由書は学年とも連携し、添削講座を利用して冬休み前から指導を始め、2月半ばに1回目の答案を完成させた。 ○COVID-19の影響で、医療機関の見学などの経験が少ない学年である。医療機関はまだ見学に消極的な所が多いが、機会があるごとに見学等への参加を促す。
		(3年) ・進路目標の実現	○進路指導部と連携し、本人や保護者への情報提供を行う。 ○さらに、入試問題への対応や情報提供などを、生徒の志望に即して行えるよう、教科担当と連携する。 ○オープンキャンパスへの参加を促す。人数制限がある場合が多いことに留意させる。 ○これまでに受講した「医歯薬講座」の感想文等を、志望理由書や面接に活用させる。 ○COVID-19の影響で、オンライン面接入試を実施する大学がある。実際にZoom等を使用して面接指導を行う。	a		○Classiを利用し、本人や保護者と連絡を密にとることができた。 ○Webではなく、オープンキャンパス実施の大学も増えた。情報提供を行ったが、次年度はさらに、生徒が主体的に情報を取得し、行動する力を身につけられるよう指導する必要がある。 ○次年度は、茨城県出身者対象の経済的優遇措置がある大学の情報など、多様な情報を提供できるようにする。進路指導部とさらに連携する。 ○「医歯薬講座」資料のファイリングを徹底させる必要がある。 ○オンライン面接入試はほとんどなくなった。 対面の面接練習を行ったが、推薦入試の時期などは、担当を分散できるとよい。今以上に学校全体での取り組みが必要だと思われる。
特進i	コース目標の明確化。 茨城大を中心とする国公立大学合格	○特進iコースは、茨城大学を中心とした国公立大学合格を明確な目標として掲げ、国公立大学進学への意欲を高めるコース行事を多く取り入れる。 ○推薦入試の武器となる探究活動をより高いレベルに引き上げるため、外部コンテストにコースとして積極的に参加する。 ○iセミナーや課外授業で、基本的な学力の向上、資格取得者増を目指す。 ○進路指導部・進学コーディネートセンターとの連携を強化し、国公立大学への合格者増を図る。	a	A	○令和4年度の国公立大学合格実績に続けるよう、国公立大学にチャレンジする生徒を増やしたい。 ○進路関係では、情報提供はもちろんだが、与えられるだけでなく、自ら情報を収集する姿勢を身につけてもらいたい。 ○オフラインでの進路関係イベントへの参加をより増やしていきたい。 ○コース行事について、規制緩和を見越して事前事後指導の見直しを図りたい。 ○コース行事について、対面での実施をより充実させていきたい。また、保護者が出席できる行事を増やしていきたい。 ○探究の外部コンテストに参加するグループを増加させたい。 ○探究ではプレゼンテーション、ポスターセッションなどな形式でも対応できる力を身につけてもらいたい。 ○Chromebookを効果的に使いこなし、ICTツールにも強いコースにしていきたい。	
		1年 国公立大学進学の意識付け	○早期に大学見学会を実施することにより、大学進学への意識を高める。 ○「教養講座」で探究活動への知識を深め、iプロジェクトにつなげる。これが大学の推薦入試に活かせる活動であることを理解させる。 ○文理を適切に選択できるよう出張模擬授業など進路指導関連行事を充実させる。	a		
		2年 進路目標の具体化と早期の対応を行う	○大学見学会や茨城大学説明会の事前事後指導を強化することで、大学進学をより強く意識させる。 ○「夢ナビライブ」などを活用し、2年次から研究室訪問を体験させ、志望大学との繋がりをつくる。 ○探究活動以外でも、大学主催のコンテストを積極的に紹介し参加を促す。 ○推薦入試対策として、志望理由書の指導を充実させる。	b		
		3年 大学進学の実現	○各大学入試要項について、変更点に注意しながら研究し、他部署との連携を図って、進路実現のための情報提供を積極的に行っていく。 ○進路指導部と連携し、国公立大学希望者への個別入試科目指導を早期から行う。 ○志望理由書・小論文・面接指導についても早期から行う。 ○外部講師による国公立大学推薦のための面接対策を実施する。	a		
進学V	キャリア教育の推進	○従来通り特別講座やキャリア講座を実施し、仕事についての理解を深める。また、林業体験やインターンシップを導入し、社会に通用する人材の育成を目指したい。	a	C	<キャリア教育の推進> ○協力いただいた企業も多く、職業に触れる機会をたくさんの方に生徒に提供することができた。次年度は、より規模を拡大し、実施していきたい。また、インターンシップについては、進路決定にどう影響したか追跡調査をおこないたい。	
		基礎学力の育成	○1学年進学Vコースを対象にWTを導入し、基本的な学習内容の復習をおこなう。また、WTで学んだことを踏まえて基礎学力診断テスト(スタディプログラム)を受験し、基礎学力の定着を目指す。*全員Dゾーンから脱却し、Cゾーンを目指す。	c		<基礎学力の育成> ○Cゾーンに到達できた生徒が増えた。次年度は、WTの実施方法をより具体化し、実施したい。
		道徳心の育成	○年々SNSに関わるトラブルの増加が目立つ。その背景にあるのは、人と人とのリアルなかわり合いが希薄になっていることが原因であると考えられる。そこで、メディアリテラシーの育成はもちろんのこと、人と接する際に必要なマナーや規範意識の育成に力を入れていきたい。	c		<道徳心の育成> ○SNSでのトラブルが多数起きてしまった。SNSと現実の生活との境界線があいまいになっている生徒が多いように感じた。次年度は、その点にも留意し、指導したい。
		検定試験の受験機会の充実化	○漢字検定の受験は例年通り実施する。また、英検受験については、6月に1、2、3学年合同で全員受験をおこなう。	b		<検定試験の充実> ○計画通り実施できたが、予算面で課題が出た。学年との連携が必要である。
		学年・コースの枠を越えた行事の実施	多様性を認め合うことを求められている現代社会において、様々な価値観に触れることは必要不可欠であることを踏まえ、学年やコースの枠を越えた行事を実施し、多様な考え方を身に付けさせたい。	c		<学年・コースの枠を越えた行事の実施> ○十分に実施できなかった。今後は、行事を精査し、学年やコース間で調整し実施したい。

※ 評価基準 A：十分達成できている B：達成できている C：概ね達成できている D：不十分である E：できていない